

〈書評〉

網野善彦著 『日本論の視座』

——列島の社会と国家——

山折哲雄

網野善彦の歴史学の魅力は、アンチテーゼの鮮明な提示にある。アンチテーゼをくりだす、その鋭い視点の設定にあると思う。一見、穏やかな物腰に身を包む網野はかつての若き少年の日、天真爛漫の草相撲の土俵で、大兵の相手を手玉にとってはげしい突き押しを展開したのではないか。

今日、「網野史学」のシンボルマークとされている感のある「非農業民」は、ほとんどかれの方法としてのアンチテーゼを象徴する名辞になっていると私は考える。いうまでもなくその名辞は農業民にたいする山民や海民、定着民にたいする遍歴民、総

じて土地に緊縛された人民にたいする無縁、公界に生きる人間たち、などを包含する。むろんことからは、たんにそれにとどまらない。そもそも「非農業民」の存在は、稲作農耕民という一元的「常民」にたいする、アンチテーゼとしての強力な磁場を形成しているからだ。たとえば水田耕作にたいするに、焼畑を含む畑作への注視——。そしてその視線の彼方に、山野を往来する不逞・潤達な遍歴職人たちの姿態があたかもウンカのごとくわきおこってくる。そのように錯覚するほどに、その登場の仕方はいつも鮮やかだ。

このような「山民」世界への注視が、さらに「海民」たちへの舌なめずりするよう

な好奇心関心に支えられているのは当然である。古代から中世にかけての転換期に、商船や海賊船をかつて洋上に進出した海民たちのさっそうとした活躍のあとを浮きあがらせて、われわれの視野を遠心的に解放してくれる。その構想力は、日本列島という静態的な小島の岸边に打ち寄せる広大な海洋の波動を、あたかも拡大鏡で映しだしているかのごとくである。

だがむろん、網野の外部世界にむけられた遠心的な構想力は、ひとたびその静態的な小島の内部へとむかうとき、たちまち対立緊張をはらむ権力論へと展開していく。すなわち貴族たちを中心とする京畿の王朝政権にたいして、武士たちの野心と覇気を

結集する関東の幕府政権を対置する方法のなかにそれはあらわれている。鎌倉期から南北朝期をへて室町時代にいたる権力闘争を分析する過程で、網野がたえず念頭においていた論点が東国の統治権の独自性であり、東国に根ざす国家的契機的重要性であった。「西」のテーゼにたいする「東」のアンチテーゼという第一ヴァイオリンの旋律が、ここにも変ることなく高らかに鳴りひびいているのである。そしてその旋律の助走において、北海道のアイヌ文化と南方沖縄の琉球文化の歴史がくり返し回顧され、さらにそれにオーバーラップする形で朝鮮半島から中国大陸にかけての東北アジア圏をめぐる間奏曲が挿入される、といった工合に全体が編成されていく。いってみれば、インターナショナルな遠心力がインターローカルな求心力を駆動しつつ、その歴史記述の軌道が敷設されているとってよいのである。

こうして網野善彦は、これまでの「日本社会論」にびまんしていた「単一民族論」「単一国家論」、または「稲作一元論」「日

本島国論」を逐一批判しつつ、多元的な民族—文化論、多中心的な権力・国家論をそれに対置して、「日本論」についての新しい「視座」を仮構し仮説しようとしている。その網野の切実な思いは、たとえば本書劈頭のつぎのような言葉のなかに凝縮してあらわされているとってよいだろう。すこし長い引用になるけれども、網野の真意をあやまらず伝えるために、ここでは最小限の省略にとどめて関係の全文を記すことにする。

われわれはこれまでの「日本民族」という言葉をあまりにも安易に用いすぎてきたのではなからうか。もとより日本国の国民は実在する。しかし「日本民族」といった場合、それがはたして日本国民のすべてをおおうものと考えられているのか否かがまず問題である。そしてそれをさらにつきつめてみると「日本民族」という集団自体が、これまで自明な存在として常識的に考えられてきたような意味で、はたして存在するかどうか

すら、一個の問題となりうるといわなくてはなるまい。

また従来、「日本民族」は世界の諸民族の中でもまれに見るほど、均質度の高い民族といわれてきた。……………

しかし一歩退いて考えてみると、この「均質性」が「閉鎖性」と表裏をなしており、それ自体、他民族に対する抑圧、自らの内部の少数民族に対する無視を伴っていることを、ただちに気づかざるをえない。外国人の指紋捺捺制度に見られる無神経さ、アイヌ、ウィルタ、さらに沖縄人に対する姿勢の中に、そうした「均質性」のおしつけと「閉鎖性」を見出すことは容易であらう。

ひとまずその現実を認めた上で、こうした「日本民族」の「均質性」の持つ消極面に着目してみると、じつはこの見方そのものが一つの虚偽意識—イデオロギーであり、それが現在、日本人の意識の中に深く根を下ろし、「常識」として通用していること自体の持つ問題が否応なしに浮かび上がってこざるをえない。…

……

しかし、こうした常識的な「日本民族」論の持つ抑圧性と閉鎖性を克服し、「日本民族」を民族たらしめている真の基盤、人類社会の中におけるその位置づけを明らかにし、人類の生存、平和の実現に向けて日本人に課された歴史的な課題——「天職」を見出すためには、この「常識」をこれまで支えつづけてきたいくつかの見方に、徹底的な再検討を加えてみる必要がある。(本書三三〇四頁)

網野のいわんとしていることは明快である。その「視座」の銃口は、正確に「日本民族の均質性」というイデオロギーにむけてすえられている。その常識的な「日本民族」論のもつ「抑圧性」と「閉鎖性」を暴露することに照準が定められている。こうしてその「視座」の彼方に、「人類の生存と平和の実現」という日本人に課せられた「歴史的な課題」、すなわち「天職」が高く掲げられている。

網野「史学」は、まさにこの「天職」を

遂行せんとして登場してきたということだ。その颯爽として緊張感あふれる提言に、私もまた共鳴する。歴史の学とはそもそも、そうした視座と構想のなかで思索され反芻されなければならぬものと私もまた思うからである。

しかしながらそれにして、その常識的な日本民族論にただよう「抑圧性」と「閉鎖性」の見方をとらえて、その全体が「一つの虚偽意識——イデオロギー」であると断罪するその一途な激しさは、いったいどこからくるのか。そこには、さきにも述べた網野の史観における方法としてのアンチテーゼの情熱が決然と鎌首をもたげているではないか。いわばかれはここでも、「日本民族論」なるものを撃つために、自己の拮抗する思想的立場を対置してみせているのである。「虚偽意識」としての「日本民族論」イデオロギーにたいして、自己の信念にもとづく真実の思想を対置しようとしているといってもよいだろう。

だが客観的にみるかぎり、この網野の思想的立場もまた、一個のイデオロギーの表

明であるといえないか。「日本民族論」というテーゼにたいする、アンチテーゼとしてのもう一つのイデオロギー——それが虚偽意識を意味するのか否かにかかわらず——ではないのか。なぜなら歴史家網野善彦は、右に引いた文章を書きつけることで、明らかに思想闘争の場に立とうと決意しているかにみえるからである。一個の歴史イデオログとしての自己の「天職」を、そこに見出そうとしているかにみえるからである。それとも網野は、「人類の生存」と「平和の実現」という課題を担う「天職」に真実の意識が凝集し、それにたいしてこれまでの「日本民族論」に虚偽の意識のすべてが吸引されているというナイーブな二元論でことがらを割り切ろうとしているのだろうか。

だがここでは、さしあたり性急な判断はさしひかえて、もうすこしさきへ進んでみることにしよう。

本書のハイライトが、第二章「遍歴と定住の諸相」、第三章「中世の旅人たち」、そ

して第四章「中世〈芸能〉」の場とその特質」にあることはいうまでもない。網野の歴史学のもっとも魅力的なテーマが「つぎからつぎへと論じられていくのがこれらの章だからである。定住民にたいする遍歴民や芸能民の生き生きとした行動と野性的な生活の息吹きが明らかにされていく。網野のいう、アジールとしての「無縁・公界」を生きる人びとの群だ。その中世人の脈動する万華鏡が、倉の中に凍結されてきた文献や文書の世界から自在に引きだされてわれわれの眼前にすえられていく。

むろんそれらのテキストの抽出、再現の手つきが、ときにいささか並列的、羅列的にすぎている面がないではない。もうすこし構造的なコンテキストにもとづく再調整があれば、という望蜀のうらみがこのくらいわけでもない。しかしながらそうした第三者的な歎息の声を吹きとばしかねないほど、そこに展開されている材料は豊富であり、そこに再現されている人間たちの生きざまも挑発的であり圧倒的である。

さらにいえば、網野自身の資料探索の異

常な執念にも驚かされるが、同時に数々の先行研究を幅広く博搜し玩味してうむことのないその情熱もまた尋常ではない。そのことによってはじめてもたらされた眺望の視点は、まさしく中世の全域を鳥瞰してその歴史記述を躍動させている。事実の積み重ねと官能的ともいえる柔軟な叙述があいまって、長いあいだ陰蔽されていた中世のディテールを浮上させることに見事に成功しているのである。

その網野の「中世」論において世に知られているのが、十四世紀の南北朝期をもって歴史変動の分水嶺的な画期とする議論である。その画期以前を「中世前期」ととらえ、それ以後を「中世後期」と命名し、この前期から後期への過程で、さきあげた「遍歴・芸能民」たちの運命に重大な変化が生じたとする史観である。

一口にいって、歴史を漸次的―継起的な発展に沿ってとらえようとする時代区分の方法は、しばしば当の歴史の全体的な流れのイメージを濁らせるのに役立つだけである。それにたいして歴史の流れをある決定

的な時点で一刀両断に裁ちきる方法は、歴史の反転、帰趨を鮮明な文脈のなかで見定める効果を発揮するはずである。かつて十―十一世紀の転機をもって、律令日本の実質的倒壊の予兆とみなした史観があった。

また十五世紀の応仁の乱期をもって、日本人の生活様式の全面的な改変の時期ととらえた文明論が存在した。それらはいずれも小刻みな時代区分による歴史記述の無効もしくは無意味を主張する議論であったのだが、いまここに網野は、さらに中世史の叢に身をすべりこませて、十四世紀の南北朝期という決定的な切断面に血を通わせようとしたのである。列島内部の「中世」を微視し、さらに東アジアにおける「日本」を巨視するなかで、その切断面を微細に拡大してみせようとしたといつてよいだろう。

そしてその結果とりだされた歴史転換の模式が、一方の自由と野性に開かれていた中世前期と、他方の抑圧と無権利に閉ざされていく中世後期という二項対立的なコンストラクトの提示、であった。多元的な遍歴をくり返す一所不住の生活形態から土地に

緊縛される一元的支配へ、空間的な広がりをもつ無法地帯を生きる人間群から組織と統制によって囲いこまれた階層制の人間群へ、あるいは特権と狼藉を楯にする「異人」の境涯から差別と賤視によって射すくめられる「非人」の運命へ……、総じていえば明るい「自由人」の世界から暗い「隷属民」の世界への退化、転落のプロセスが、その「南北朝」という切断面の腑分けを通して、しだいに明らかにされていった。

そのことを証明するために網野がくりだす記号的キャラクターたちは、驚くべきこととそのほとんどが意表をつくようなマイナーな遍歴民たちである。たとえば傀儡子、遊女、白拍子、桂女、鶺鴒、女商人などの遍歴する女性たち、鋳物師、檜物師、菓売、飴売、唐人、そして酒麴売、酒屋、塩売、楽人、博打打ちなどの遍歴職人、がそれだ。そこに展開されるかれら遍歴民たちの姿は、たしかに群をぬいて多彩であり、世相の転変を絵に描いたように鮮やかである。だがそれにしても著者は、それらのキャラクター

たちがよもや時代の軌道を広く深く開鑿している当の担い手たちだったとは思ってはいないだろう。なるほど網野は、読む者をして一見そう信じこませるほどに、それらのキャラクターたちの身に寄りそって叙述をすすめている。しかしそこにこめられている網野の思索の中枢は、そうは考えてはいまい。なぜならかれの論理のほこ先は、あくまでもそのキャラクターたちの行動のなかに時代の大きな変動の反映をこそ見ようとしているからである。だが網野は同時に、時代によって躍らされているはずの主人公たちが、すくなくとも「中世前期」においては時代の陰の演出者たち、すなわち見えざる手の支配の機構そのものを無化しようとしていたとする視点をちらつかせてもいる。時代によって躍らされているかにみえるマイナーな主人公たちが、明るい「中世前期」においては実は時代の精神を先きどりする真の主人公であったとする、一種の錯覚効果を露出させることがないではないのである。そこに、網野史学におけるレトリックならざるレトリックが巧みに

仕掛けられていることに注意しなければならぬ。

そしてそうであればこそ、その真の主人公たちが「中世後期」にいたっていかにかにその主人公の座をすべり落ち、みるみる生氣を喪っていったか、そのプロセスが、いわば中世的悲劇の道行として大きくクローズアップされることになるのだ。そのクローズアップの効果がつよまればつよまるほど、「中世前期」の栄光の額縁につつまれた舞台が明るい輝かしいフットライトを浴びる。網野の中世論は、まさにそうした照明効果のなかで明晰な像を結ぶことになるのである。

こうしてかれは中世前期と中世後期を等分に鳥瞰しつつ、その大画面に「解放された」遍歴民から「抑圧されていく」遍歴民へと推移していく航跡を投影する。「自由な」遍歴民から無権利の遍歴民へと転落していくプロセスを透視する。または、こうもいえるであろうか。「中世前期」にたいして「中世後期」をさしだすことによって、社会編成の歴史的必然あるいは偶然を論証

しようとした、と。またはその逆に、国家的統制に締めつけられる「中世後期」にたいして、その抑圧機制に抗する無縁・公界の「中世前期」を対置し、そのことで社会編成のゴールデン・エイジを仮構しようとしている、と。

いずれにしても、ここでもまた網野が方法としてのアンチテーゼをひそかに援用していることは多言を要しないだろう。中世の歴史的風景にそれぞれ陰影にとむ素材を自在に投げこんで、明暗のくまどりも鮮やかな書割をつくりだしているのである。

その網野の歴史的「視座」は、たとえばつぎのような言葉のなかに余すところなく尽されているといえるだろう。

鎌倉・南北朝期ごろまでの遍歴民は、決して卑賤視の重圧の中にしばられることなく、なおそれなりに自由に、ときには奔放に、自らの生活を営んでいた。民、農業的——水田的秩序に立つ見方に対し、十分拮抗するだけの力を持ち、あ

る場合は重大な脅威となり、またあるときは強い魅力を持って、定着民の秩序内の人びとをひきつけてやまなかったのである。

その意味で、この時期の遍歴民・遊行民を、体制から「疎外」され、国家的秩序の最下層に「差別」された「賤民」と見ることはできない、と私は考える。……遍歴民は、ある種の「特権」を国家的・社会的に保証され、独自の秩序と組織を持って活動しており、決して「賤民」身分に固定化されてはいなかった。遍歴民を常に、体制から離脱・脱落し、あるいは疎外された「化外の民」と見る見方は、さきにふれたように、例えば匡房のような人の目を通して（大江匡房の『遊女記』や『傀儡子記』など——筆者注）、この人びとを見るところから出てくるといえよう。

それは、近代の国家を過去に投影し、古代以来、国家体制を強固なものとして決めてかかる偏見に通ずるとともに、他方では、遍歴民をもその網の目からめとる

うとする、国家権力の柔軟な狡智さを過小評価することにもなるのではなからうか。（二五七〜八頁）

ここでは鎌倉・南北朝期ごろまでの遍歴民が、自由奔放に生き、農耕定着民に拮抗するだけの独自の生活空間を確保していたことが印象ぶかく主張されている。かれらはいわば各地に散在する「解放区」のなかを泳ぐ自在な魚群のように行動していた。かれらはある種の「特権」を国家的・社会的に保証され、独自の秩序と組織をもって活動していたというのがそれである。その場合、国家的・社会的に保証された「特権」の中枢に天皇の権威が宿っていたというの、周知の、網野のもう一つの主張である。

ところがその中世前期的な遍歴民の系譜が、やがて「国家」によって統制の対象とされ、農耕定着民の体制から「疎外」されたがって国家的秩序の最下層へと「差別」され、「賤視」のまなざしを注がれるようになっていく。網野の、その第一ヴァ

イオリンの旋律の底から、いつでもせりあがってくる第二ヴァイオリンの旋律である。中世前期の一種理念化された観のある遍歴民イメージに代って、アンチテーゼとしての被抑圧民のシルエットが浮上してくるのである。空間化された「解放区」を語るときの生々とした史眼は、しかしその解放区を時間化して語るとき、にわかに短音階に収斂され、グルーミーな糸をつむぎだしはじめるのだ。そしてこの網野のグルーミーな史眼が最後に把握し射抜こうとする対象が日本の「国家」であり日本の「民族」ということになる。アンチテーゼとしての歴史学はここではじめて正当な敵を眼前にひきすえ、ありうべき「止揚」への段階にむけて始動をはじめ。歴史学的方法としてのアンチテーゼが、いわば哲学的・思想的な方法としてのアンチテーゼへとむかつてはばたこうとしているといってもよいだろう。だが網野は、その道筋を本書においてどのようにつけようとしているのか。またその構想をどこまでつきつめようとしているのか。それが最後に考えなければならぬ。

問題である。

もっとも、そのありうべき止揚への課題にたいする網野自身の思い入れは、本書の開巻劈頭に「日本」という国号の序章を配していることからただちに推測されるだろう。そこでかれは、「日本」とは何か、「日本人」とは何かについて自問自答し、その内容と範囲がけっして自明のものではなかったゆえんを、先行の諸説を引用しつつじゅんじゅんと説きすすめている。

その結果かれは、「日本」はそれ自体まったく「歴史的な産物」であったという至極当然の結論をひきだし、つぎのようにいっている。

それゆえ、いまだに広く世に行われている「はじめに日本人ありき」ともいべき枠組に立った歴史像を、われわれはただちに捨てなければならない。それは事実在即して誤っているがゆえに、日本そのものに対する見方を、これまで大きく誤らせつづけてきたと私は思う。

繰り返しになるが、「天皇」の称号の

定まる以前に天皇が存在しないのと同様、「日本」という国号の定まる以前には、日本も日本人もありえないのである。現在の古代史家の研究成果に依拠すれば、「雄略天皇」はもとより、「天智天皇」という天皇すら存在しないのであり、縄文人、弥生人はもとより、古墳時代の「倭人」も、さらには「聖徳太子」もまた決して「日本人」ではなく、邪馬台国も「日本」ではない。「日本」は「天皇」の称号と切り離し難く結びつきつつ、畿内の小地域に基礎を置き、本州・四国・九州の大部分を支配した律令国家から出発し、その後の国家と列島の社会・地域とのきびしいせめぎあいを通して、しだいに現在にいたったのである。

いまだ明らかにされていないことのきわめて多いその経緯を、列島に生きたすべての人びとの生活に即し、とらわれぬ目で精密・正確にたどり、新たな歴史像をすべての日本人の共通した認識にすることは、今後のわれわれに課された重大な課題である。この課題が基本的に達

成されたとき、日本国民の総意により、われわれは「日本」という国号を再検討した上で、太陽に対する無限の感謝をこめたものとして、あらためて継続することもできるし、また、さまざまな汚辱と血にまみれた国号として、これを捨て去り、まったく新しい国号を定めることもできるのであり、それも決してありえないことではない。そしてこの選択にわれわれが冷静に立ち向うときは、「天皇」の称号の消えるときとおそらくは一致するものと私は考えている。

日本論はそこまでの見通しをもつ視座に立つて、論じられなくてはならない。(二六―七頁)

私もまた、この網野の判断をまことに正当なものだと思う。「日本」という国家や「日本人」という民族がまったく「歴史的な産物」であった事実を疑うことほど愚かなことはないからだ。そして第二に、右に引用した文章の終結部分でいっている網野の慎重な提言にも、静かに耳を傾けたいと

思う。そこでかれは、日本という「国号」(すなわち国家)にたいする二つの選択肢をかかげ、それを「太陽に対する無限の感謝」をこめて継承するものと考えるか、それともさまざまな「汚辱と血にまみれた国号」として捨て去り、まったく新しい国号を定めるか、そのいずれを選ぶかはわれわれの自由にまかされているといっているからだ。

とはいえ、それでは網野自身の真意はどこらの側にあるかといえ、それが後者に大きく傾いていることは一見して明らかである。なぜならかれはその文章につづけて、間髪をいれずにつきのようになっているからである。すなわち、古い国号を捨ててまったく新しい国号の選択にむかうとき、そのときはじめてわれわれは「天皇」の称号の消滅の時期に立ち合うことになるだろうといっているからである。

みてきたように網野は、本書の序章においてほとんどすべての見通しを語っている。中核的な主題を一直線に提示しているといってもよい。そしてこの一直線の主題は、

首尾一貫するような形で本書の終章にその姿をあらわす。中核的な主題がかすかな変奏をみせつつ、いっそう明確な輪郭のうちに浮上してくるのである。その格調の高いマニフェストの行方をうかがってみることにしよう。

われわれにとつての最大の課題は、国家の成立よりも遙かに遠い以前からこの列島に生活してきた人びとの社会、海を通じて広く周囲の社会と緊密に結びつきつつ、人類史の一環として列島の諸地域にさまざまな展開をとげた社会、自らの中から、「日本」を国号とする国家だけでなく、複数の国家、あるいは政治的統合体を成立させ、その刺激と影響を受け、またそれに抗し、きびしい緊張関係を保ちつつ、多様な生活をくりひろげてきた人びとの社会とその歴史を、できうる限り隅々まで明らかにし、列島の自然との関わりと、この歴史の中で形成されてきたこの社会の個性を明らかにすることにあり。[「日本」さらには「国家」を超え



る思想と論理がその中に豊かに憩っていることは疑いない。自然と人間との関係が根本から問われている現在、それを全面的に開花させることは、われわれにとっての急務であり、日本論は究極的にはそこをめざすものでなくてはならない、と私は考えている。(三七六頁)

ここにはたしかに、「日本」という国号が「歴史的な産物」であった事実を論証することを通して、最終的にその日本という「国家」をのりこえる思想と論理を追究すべき道筋が語られている。この列島に生活してきた人びとの政治、経済生活を歴史的に明らかにすることで、その可能性が実現されるであろうとする予感が告白されているのである。網野史学の本質がいわばマニフェストの形でそこに露顕しているといってもよいだろう。

私は網野の中世——遍歴民論が、行きつくところ「国家」ののりこえの思想と論理を構築せんとする情熱に支えられていることに感動を覚えずにはいられない。というの

も本書の序章と終章に提示されている重大な主題が、実をいうと海民や山民、さらには芸能民などを中心とする中世の遍歴民たちの行動を通してつかみだされた主題であったことに、私もまた深く共感するからである。

しかしながら私のこの感動と共感はいまだかならずしも網野の議論にたいする全幅の了解の域には達していない。なぜならかれが提示したその主題（もしくは主題群）は、本書の枠内においてはそれ自体として論理的・思想的にたどられてはいないからである。さらにいえば序章と終章において提示された主題と本書の核部分をなす「中世——遍歴民」論とのあいだには、いまだに論理的・思想的ギャップが深々と横たわっているからである。網野の綿密・詳細をきわめる中世——遍歴民論は、なるほど一面において国家をのりこえる可能性を予測するものではあるが、しかしそれはかならずしも「国家」をのりこえる論理や思想そのものの提示にはいたってはいないからである。

くり返していえば、網野の仕事は「非農業民」たちの実態を歴史的に明らかにすることから開始された。かれらが定着民にたいする遍歴民として、無縁・公界の「解放区」に生きる自由民であったことを歴史的に実証することに照準が定められていた。そしてそのことによって「中世前期」という黄金の額縁に輝く歴史学的「典型」が誕生することになった。網野はその「典型」を駆使し操作することによって、「中世」を微視し日本歴史の全体像を巨視しようとしたのである。

しかしながらその歴史学的「典型」はさききのべたように、あくまでも方法としてのアンチテーゼのなかからつむぎだされたものであった。かれは遍歴民を定着民に對置したように、明るい中世前期をグルーミーな中世後期に對置したのである。このアンチテーゼの手法は、たしかに中世という限定された時代を歴史的・時間的に微視しようとするとき、眼の覚めるような効果を發揮しえたのである。ところが、その中世前期という「典型」をそのままの形で日本の

国家というアモルフな存在に對置しようとするとき、はたして同じような効果を發揮することができ得るであろうか。それだけではない。そのうえこのような對置をほどこすことだけで、さらに国家ののりこえという大きな課題に肉薄し挑戦することができ得るものであろうか。そうするには、ほとんど不可能に近い力業が要求されるのではないか。そのとき網野のアンチテーゼの方法はきわめて困難な事態に逢着するのではないかと、私は思うのである。

たとえば網野によれば、中世前期までは、無主の山野河海および交通路にたいする支配権を天皇が掌握していたという。当時の遍歴民たちはその「聖なる」天皇の直屬民として諸国往反の自由を公認されていたからだ（たとえば本書、一九二頁）。このよく知られた網野の第一テーゼは、しかし同時に、天皇という名の専制によって包囲されつづけてきた日本国家、という重苦しい第二テーゼと拮抗しオーバーラップしていることに注意しよう。その拮抗と緊張のあいだには、一挙には埋めがたい途方もない闇

がかくされているであろう。この第一テーゼと第二テーゼのあいだに横たわる深い亀裂と断絶のなかに、おそらく国家というものへの不可思議な魔力がひそんでいるのではないか。のりこえられるべき国家というものの巨大なエネルギーが封じこまれているのではないだろうか。

そしてこの不可思議な魔力と巨大なエネルギーを撃つために、網野のいう「中世前期」はほとんど有効な思想武器にはなりえないだろうと私は思う。「中世前期」というアンチテーゼの「典型」をもってしては「国家」という巨大なテーゼをのりこえることはできないのではないかと思う。その歴史的な「典型」を「国家」をのりこえるための思想武器に鍛えあげるためには、おそらく網野善彦自身が現在の歴史学者の境涯から身を翻じて思想家へと転身をとげることが必要なのではないだろうか。

そしてそのときはじめて、本書の核部分で展開されている歴史学の内容（中世論）が、序章と終章において宣言されている課題（国家論）へと論理的にも思想的に

も架橋されるときがくるであろうと、私は思うのである。

（一九九〇年一〇月刊 小学館）